

外国にルーツを持つ子どもたちのための学習支援教室の実践 —保護者との協働活動に着目して—

伊澤明香 (大阪大学大学院生)

米澤千昌 (大阪大学大学院生)

吉川夏渚子 (大阪大学大学院生)

大阪市西淀川区は工場勤務の外国人労働者が多い地域である。外国人保護者は日本語が分からないため、子どもの家庭学習、進路や教育費に不安を抱えており、その解決策として2015年10月、外国人保護者を中心に「西淀川インターナショナルコミュニティ(NIC)」を結成した。翌年1月、NPO法人多文化共生センター大阪(以下、共生センター)とともに同地区内唯一の外国にルーツを持つ子どもたちのための学習支援教室「きらきら」を立ち上げた。運営は共生センターが主体となり、NICは保護者への連絡や広報協力などに携わっている。

教室への参加者は2016年10月現在、南米やフィリピンにルーツを持つ小中学生12名で、家庭環境だけでなく、日本生まれや来日間もない子など背景は様々である。

教室は週に1回90分、学校の宿題と「チャレンジ活動」に取り組んでいる。「チャレンジ活動」では、多読や苦手分野のドリル、作文などを実施しており、子どもたちの実態に合わせて保護者とも常時相談しながら支援している。

主な指導員は日本語教育を専攻している大学院生ら4名で、指導員1名に対し子どもが2~3名の担当制を採用している。子どもの母語が話せる指導員は、学習時に彼らの母語を使用するほか、母語でのお便りの発行や家庭訪問など、保護者への定期的な連絡も大切にしている。

教室の開始からまだ1年弱ではあるが、学習の達成感を得られるようなさまざまな工夫によって、子どもたちの教室参加へのモチベーションが高まるとともに、教室が仲間の集う居場所の一つにもなりつつある。また、最近では成績の伸びや学習態度にも変化が見られるようになった。

教室運営には指導員確保・財政など課題もあるが、同地区は外国人住民を地域の一員として温かく受け入れ、子どもたちを地域全体で育てていこうとする雰囲気があり、これまでも地域の協力を得て課題を乗り越えてきた。今後も、保護者、地域、共生センター一間のさらなる協働が期待される。